

歴史家の誕生

—— 修行時代のガブリエル・モノー 一八四四～一八七〇 ——

渡 邊 和 行

目 次

- 一 はじめに
- 二 歴史家への道程
- 三 歴史家モノーの誕生
 - (一) ヴァイツとの邂逅
 - (二) 高等研究院とモノー
- 四 むすび

一 はじめに

「今世紀は歴史の世紀である。」⁽¹⁾これはフランスの歴史家、ガブリエル・モノーが一八七六年に述べた言葉である。一八世紀を哲学の世紀と呼び、一九世紀を歴史の世紀と呼ぶことは、今日では通説となった。歴史の世紀の先鋒を務めたのは、ドイツである。ランケの登場によって歴史学の「離陸」が始まったことは、周知の事実であろう。従って歴史の世紀とは、その実質においてドイツ歴史学の世紀、なかんずく、ランケ史学の世紀であったのである。このように近代的な学問（＝科学）としての歴史学が成立したのは、一九世紀前半のことである。制度的には、ベルリン大学に歴史学講座が設けられたのを嚆矢としている。ところが隣国フランスでは、学問としての歴史学の発達はドイツより半世紀ほど遅れた。このタイム・ラグは、史学史的には重要な問題を提起している。なぜならこの問題を自覚するところから、フランスの歴史学は再出発したからである。タイム・ラグの理由のいくつかは本論のなかで指摘されるであろうが、いずれにせよ、哲学や文学から独立した学問としての歴史学が誕生したのは、一九世紀のことではないのである。ありていに言えば、歴史をなりわいとする人が生まれたのがこの時代であった。歴史家も含めた学者が職業として公認され、制度的に保証されたのがこの世紀であった。すなわち、今日的な学問体系が確立し⁽²⁾つつあり、それにともなつて高等教育機関の整備拡充がなされたのが、一九世紀であったのである。

フランスにこのような状況が芽ばえたのは、一八六〇年代の自由帝制を迎えてからのことである。この頃、学問としての歴史学、独立科学としての歴史学の確立を志向する一群の歴史家が簇生したのである。今日、実証主義史家と呼称される歴史家たちがそれである。一九世紀後半に、独立科学としての歴史学を自覚的に探究したのは、フュステ

ル・ド・クーランジュ（一八三〇—一八八九）、ガブリエル・モノー（一八四四—一九二二）、エルネスト・ラヴィス（一八四二—一九二二）、シャルル・セーニヨボス（一八五四—一九四二）、シャルル・ラングロワ（一八六三—一九二九）らであった。クーランジュは考証と体系的精神の結合に、モノーは史料の編集と『史学雑誌 *Revue historique*』の創刊に、ラヴィスは歴史教育の改革に、セーニヨボスは歴史学方法論の討究に、ラングロワは史料の編纂にと、それぞれ執筆したのである。これらの歴史家は実証科学の世界観によって規定され、歴史学の科学化や高等教育の改革といった共通の目的をもっており、その意味で実証主義史家として一括されることが多い。しかし続稿で論ずるように、クーランジュ、モノー、ラヴィスらの第一世代とセーニヨボス、ラングロワらの第二世代との間には、方法論のうえでニュアンス以上の差があるし、第一世代のなかでも、クーランジュとモノーの間の論争は有名であった。このように実証主義史学は、フランスに出現した最初の歴史学の学派とはいえ、凝集した学派を形成していなかったことを牢记すべきであろう。従って「実証主義史学」ないし「実証主義歴史学」という術語によって、筆者は、モノーを中心とした第一世代の歴史観を含意させており、のちにアナル学派から非難された実証主義史学については、それを「素朴実証主義」ないし「史料実証主義」と形容して区別していることを闡明しておきたい。

ところで筆者はすでに、このような実証主義史学が成立する背景についてラフなスケッチを試みた⁽³⁾（以下、前稿と呼ぶ）。そのなかで筆者は、トーマス・クーンのパラダイム論に示唆をえて、フランスにおける歴史思想の展開の骨法を記しておいた。筆者がクーンのパラダイム論に注目したのは、以下の理由による。第一に、パラダイムを「特定の科学者集団を特徴づける分析枠組⁽⁴⁾」と定義すれば、歴史観というものもパラダイムとして把握することが可能であること、第二に、旧パラダイムから新パラダイムへの転換を史的展開として考察するパラダイム論は、科学思想史の領域を越えて思想史全般に妥当性を有すると考えられること、第三に、パラダイムの制度化という方法的視座をもつパ

ラダイム論は、従来、「単なる歴史叙述の歴史、あるいは歴史思想の歴史、歴史家の伝記的研究⁽⁵⁾」として扱われがちであった史学史に、政治状況や教育行政などとの関連で史学史を論ずる総合的視点を必然的にもたらすことである。つまりある学派の成立を、社会史的視座から分析することが可能になったのである⁽⁶⁾。

以上のことを前稿の問題意識との関連で、具体的に述べてみよう。第一に、歴史家という研究者集団に寓目することによって、一九世紀前半の政治的・哲学的・文学的歴史から、世紀後半の実証主義史学へ、さらに二〇世紀のアナール史学への変遷を動態的に把握することが可能となり、それぞれの学派がそれ以前の学派の何を批判し、何を承継ないし復活させたのかをも理解することができるということ、第二に、ある学派の成立を、その時代の政治的社会的状況においてのみならず、学問の組織状況という文脈においても構造的に理解することが肝要であるということ、第三に、この作業はアナール史学に象徴される社会史的アプローチが誕生する背景の解明にも、有効であるという今日的関心である。

本稿との関連で、前稿の結論を繰り返しておこう。普仏戦争の敗北から議会共和政の成立にいたる政治の危機と、歴史学をも含めた高等教育の立ち遅れというフランス諸学の危機こそが、共和派の政治家と改革派の歴史家との同盟をもたらししたのである。この二重の危機は、共和政府が学制改革というかたちで歴史学の革新に有利な環境を用意し、歴史家が共和主義的な国民作興に協力するという相互依存関係を生み出したのである。このような状況のなかで、歴史学の科学化を志向する歴史思想のパラダイム転換がなされてゆくのであった。すなわち、独立科学としての実証主義歴史学は、歴史学内部での認識論的方法論的な刷新への自己努力と、外的な政治社会状況との合作として誕生したのである。この意味で実証主義史学も、共和主義という政治的立場を選択していたことは明白である。

ところが前稿ではこれらのことを単に指摘したにすぎず、詳細な実証的分析を欠いていた。そこで本稿および続稿

では、学問としての歴史学はいかにして成立したのか、すなわち歴史学内部において歴史学の科学化という認識論的要求がいかにして生まれ、その要求がどのようにして制度化され、その過程でいかなる問題に達着したのかを説明しておきたい。なぜならパラダイム転換のメルクマールはつねにディシプリンの「制度化とその学問内容の一新」⁽⁷⁾にあるからである。すなわち、パラダイム転換は二つの側面から成りたっているのである。第一に、あるディシプリンの方法論上・認識論上の転換にかかわる思想的側面と、第二に、新パラダイムが支持され受容され、教科書化（＝学会の共有財産化）されてゆく制度的側面である。換言すれば、第一の側面は、あるディシプリン内部における純粋な理論的認識に関する面であり、第二の側面は、あるディシプリンの外的状況たる政治や行政や学会と関連する面である。

フランスの実証主義史家のなかで、この二側面の転換に貢献したのがガブリエル・モノーであった。かれは歴史学方法論の練磨と歴史学の制度化に尽力したのである。もつとも制度化といってもその形態は多様であり、歴史学の「専門雑誌の発刊や専門学会の形成」および歴史学が「カリキュラムのなかに特殊な位置を要請」⁽⁸⁾すること、新しい学問内容が教科書化されること、それに高等教育研究機関の歴史学講座をある学派が占めることなどが考えられる。モノーはこれらの制度化と満遍なくかわり、中等・高等教育の改革⁽⁹⁾、史料集の刊行、専門雑誌の発刊、歴史研究者の組織化など、歴史教育や歴史研究の制度づくりに努力したのである。実証主義史学の成立に、さらにはフランス歴史学の確立に大きな役割を演じたのは、モノーであると言われるゆえんである。

このようなモノーの多様な活動を描写し、実証主義史学の制度化の一斑を明らかにすることは、続稿に委ねることとし、本稿では、歴史家モノーが誕生するプロセスを伝記的に説明しておきたい。なぜなら、一八七〇年代から本格的に展開される歴史家モノーの活動は、六〇年代のモノーのなかにすべて胚胎していたからである。

- (1) Gabriel Monod, "Du progrès des études historiques en France depuis le XVI^e siècle," *Revue historique*, I (1876), 27. 以下 Du progrès および R.H. と略記する。なおこの論文は、『史学雑誌』の百年記念号 R.H., CCLV (1976), 297-324 に再録されている。
- (2) このような状況は、歴史学に限らない。自然科学も含め、あらゆるディシプリンの成立は一九世紀後半のことである。中山茂『歴史としての学問』(中央公論社、一九七四年)第五章。広重徹『近代科学再考』(朝日新聞社、一九七九年)五〇五三頁。
- (3) 渡邊和行「フランス実証主義史学成立の背景」『香川法学』第五卷第四号(一九八六年)。
- (4) 佐和隆光『虚構と現実』(新曜社、一九八四年)二一九頁。
- (5) 前川貞次郎『フランス革命史研究』(創文社、一九五六年)三頁。
- (6) 念のために一言すれば、筆者は社会を認識の対象とする社会科学に自然を認識の対象とする自然科学の方法論が、つねに有効であると考へてはいない。しかも歴史学方法論の場合には、継承発展の側面も無視しえず、その意味で完全な切断はないといつてよい。それでもクーンのパラダイム論は、学的認識の変遷を動態的かつ構造的に把握する方法論であり、その歴史感覚は非常に示唆的であると云いうる。なおパラダイム論が歴史学にたいしてもつ方法的な有効性と限界については、David A. Hollinger, "T.S. Kuhn's Theory of Science and its Implication for History," *American Historical Review*, vol. 78, no. 2 (1973), 370-398. を参照されたい。
- (7) 佐々木力『科学革命の歴史構造 上』(岩波書店、一九八五年)二六六頁。
- (8) トーマス・クーン『科学革命の構造』中山茂訳(みすず書房、一九七一年)二二頁。
- (9) モノーは教育問題について、三五本の雑誌論文を公表している。Monod, "A nos lecteurs," *R.H.*, C (1909), 5.

二 歴史家への道程

歴史家モノーを語るさいに、われわれはかれのミシユレ(二七九八—一八七四)への傾倒と、ドイツの歴史学から

受けた影響という二つの側面を逸することはできない。第一の側面であるモノーのミシュレへの私淑は、次の諸事実に示されている。⁽¹⁾第一に、高等師範の学生時代から、モノーはミシュレとの文通を始めたこと、第二に、モノーが結婚後に住んだパリのアサス街の家は、長い間、ミシュレその人が起居した家であったこと、第三に、偉大な『民衆』の歴史家の死後、モノーはミシュレ伝の研究に打ちこみ、『歴史の巨匠——ルナン、テーヌ、ミシュレ——』（一八九四年）や、『ジュール・ミシュレ』（一九〇五年）を公表した⁽²⁾こと、第四に、ミシュレの資料収集に努めたモノーは、ミシュレ夫人から『鳥』と『昆虫』の作者の文書を譲りうけ、書簡や断片の刊行に尽力したことである。アナル学派のミシュレ再評価も、モノーのこれらの仕事を抜きにしては考えられない。このように実証主義史家のなかでも、モノーは国民史家たるミシュレを最も高く評価した歴史家なのである。

第二の側面は、モノーがドイツの歴史学方法論をフランスに紹介した一人であることに示されている。モノーはゲッティンゲン大学のゲオルク・ヴァイツのもとで、厳正な史料批判にもとづく歴史学を摂取してきたのである。モノーのドイツ史学への造詣の深さは、この留学体験に根ざしている。普仏戦争の直後においてすら、かれがドイツを、「研究し思索する者の第二の祖国」⁽³⁾と呼んだ事実は、ドイツでの感銘が深かったことを物語っているであろう。以上のことを念頭におきつつ、本章ではドイツに留学するまでのモノーの履歴をフォローしよう。

残念ながらガブリエル・モノーの経歴について、われわれに残された手掛りは乏しい。そのわずかな手掛りのなかから、シャルル・ベモン（一八四八—一九三九）がモノーの追悼に寄せた一文に依拠して、モノーの閲歴を略述しよう。⁽⁴⁾ベモンはモノーが創立したアルザス学院の同僚であり、イギリス史を専門としていた。『史学雑誌』には創刊号から編集助手として関与し、一八八二年からは共同編集者としてモノーを補佐した。八七年には、高等研究実習院 *Ecole Pratique des Hautes Etudes*（つづめて高等研究院 *Ecole des Hautes Etudes* と呼称されることも多く、本稿も以下

それに倣う)の教授になつてゐる。モノーを追悼するのに最もふさわしい人物である。

モノーの家庭環境として第一に指摘しうることは、かれの宗教的出自についてである。モノー自身はいかなるドグマとも無縁であり教会の外で最期を迎えたが、モノー家は信仰心のあつた家系であつたことである。しかもモノー家は、フランスでは少数派のプロテスタントに属し、眷属には宗教的迫害に懊悩した人もいた。遠祖のなかには、ユグノーゆえに斬首されたり、異端の罪で焚刑の判決を受けた者もいたのである。三等親内に五人の牧師を数え、伯父のアドルフ・モノーは著名な牧師の一人であつた。父親は原綿の卸を職業としていたが、やはり敬虔で篤信の人であつた。それはガブリエルが高等師範学校に入学したとき、父親が息子に、毎朝、新約聖書とラブレール⁽⁵⁾を一頁ずつ読むようにすすめたことにも表われている。モノー自身も一時、健全な本性に最も近い労働者の魂に美徳の種を蒔く人になることを夢みたりしたが、それはこのような環境に起因するのである。モノーの宗教的心情、政治的自由や社会改革への熱狂は、パリのリセ時代に一層、強められた。モノーは下宿先のド・プレサンセ夫妻の薫陶を受け、夫妻の生きざまから多くのことを教えられたからである。⁽⁶⁾ 夫妻は、伯父のアドルフとも親交のある福音教会派の熱心なキリスト者であつた。さらにモノーが普仏戦争に看護兵として志願し、傷病兵をてあつく看病したことや、またこの戦争体験から執筆された『ドイツ人とフランス人』の本が、戦争中、献身的かつ勇敢に負傷兵の看病につとめた「カトリックの慈善修道女とプロテスタントの看護修道女に」捧げられていることは、モノーのキリスト教的ヒューマニズムの表われといつてよいであろう。このようにモノーの人格形成のうえで、宗教的なものの倫理的影響を無視しえないのである。

歴史学との関係で興味深いことは、実証主義史家の大御所としてアナール学派から非難されるシャルル・セーニョボスの家庭も、モノー家と同じくプロテスタントであつたことである。⁽⁷⁾ 偶然の一致とはいへ、寛大で自由主義的なフ

ランスのプロテスタントのなかから、先入見にとらわれず事実を直視する実証主義の歴史観が生まれたことは、記憶に留めてよいであろう。モノーが創始した『史学雑誌』が、自由主義的プロテスタンティズムと穩健的共和主義の立場をとったことは、このような宗教的背景との関連を類推させるに十分である。⁽⁸⁾

それでは歴史研究者として独り立ちするまでのモノーの閱歷を、クロノロジックに叙述しよう。一八四四年三月七日、ル・アーヴル近郊のアングーヴィルで呱呱の声をあげたモノーは、前述したような敬虔で健全で陽気な家庭環境のなかで、幸福な少年時代を過ごしたようである。惻愴な少年であったモノーは、一〇歳（一八五四年）のとき、ル・アーヴルにあるコレージュの第六級に入学し、修辭学級の終了までそこで学んだ。ベモンはモノーの学歴をこのコレージュから始めているが、地元の初等学校を卒業してコレージュに進んだのであろう。⁽⁹⁾モノーがコレージュに進学したのは、おそらく息子の驥足をのばしてやろうという両親の考えによるものと思われる。地方のコレージュで好成績を修めたため、両親はガブリエルを高等師範学校へ進学させることを決意し、パリのリセで勉強させることにした。このコースは、当時の中産階級の知的エリートが歩む常道であった。

一八六〇年から六二年にかけて、モノーは二つのリセで学んだ。リセ・ボナパルト（のちのリセ・コンドルセ）とリセ・ルイール・グランである。リセ・ボナパルトでは修辭学級に、リセ・ルイール・グランでは哲学級に在籍した。パリのこれらのリセでも、かれが科学と文学の両分野で傑出した才能を示したことは言うをまたない。パリのリセ時代のモノーに、影響を与えた師は三人いた。一人はいわば精神面の指南役であり、他の二人は学業面の指南役であった。前者は既述の下宿先きのド・プレサンセ夫妻である。夫のエドモン・ド・プレサンセ（一八二四—一八九一）は自由教会の指導的牧師であり、一八五四年に『キリスト教評論 *Revue chrétienne*』を発刊し、一八七一年からはリベラルな共和派の議員として政界で活動した人物である。モノーは夫妻から精神的向上の意義、および善や自由や寛容の理

想による人格の陶冶を教えられた。モノーは「エドモン・ド・プレサンセのそばで生活することは、喜びであり恵みであった」と回想しているほどである。⁽¹⁰⁾ 感受性の豊かな青年に成長していたモノーは、夫妻との談笑にいたく感佩したのである。それは還歴を迎えたモノーが、青春時代を回顧して、この夫妻に感謝の意を表明していることにも示されている。この夫妻との交際は高等師範時代も勿論のこと、終生、続く。モノーはこの交わりを通じて、経済学者のシャルル・ジッドやロマン語学者のポール・メイエル（一八四〇—一九一七）、のちに初等教育局長となる教育学者のフェルディナン・ビュイツソン（一八四一—一九三二）らとも近づきになったのである。このような人々との出会いは、モノーにとって貴重な財産となるはずである。

勉学の面でモノーが感化を受けたのは、リセ・ボナパルトの文学教授であったフランソワ・トミー・ペランと神学を研究する九歳年長のいとこのシャルル・バビュである。ペランは都会に出てきた一六歳の地方出身者を暖かく激励し、意気消沈していたモノーに自信を与え、高等師範に進学することを推めた。モノーも「ペラン氏の激励と氏の活気と生彩に満ちた教育は、私の（高等師範）合格に大きく寄与した」と述べている。⁽¹¹⁾ またバビュは、歴史主義の思想にも影響を及ぼしたシュライエルマツハーの教えを摂取して、ドイツから帰国したばかりであった。モノーはこのいところから、ドイツの学芸の優秀さについての情報を得たことであろう。このようにモノー家およびモノーの周辺にはドイツ留学の経験者が多くいるが、この事実はモノーのドイツ留学の伏線として無視しえないのである。

リセを卓越した成績で卒業したモノーは、一八六二年に高等師範学校に入学した。同期生には、六三年に文部大臣となるヴィクトール・デュリュイの息子アルベールと、エルネスト・ラヴィスがいた。⁽¹²⁾ 残念ながら高等師範の三年間をモノーがどう過ごしたか、学者への動機づけは何であったか、なぜ歴史を専攻したのかなどの事柄を詳らかにしない。どの時点でモノーは、歴史を職業とする決意をしたのかというきわめて重要なことも判からない。ただ三年後

の一八六五年に、歴史学の一級教員資格試験を首席でパスした事実を知るのみである。しかしまったくヒントがないわけではない。まず高等師範での生活について。ラヴィスは規則づくめで「単調で無味乾燥し窮屈な」高等師範の学生時代を回想しているが、モノーの生活も同様であったと思われる⁽¹³⁾。次に歴史学との関係について。決定的影響とは言いがたいが、モノー自身は歴史家になることを方向づけた最初の人物として、コレージュの歴史教師ボレリーを挙げて⁽¹⁴⁾いる。もつともボレリーには一回しか言及していないので、その影響は、他の学科目に比べて歴史に関心を向けさせた程度のものではなかったかと思われる。それよりもリセ・ボナパルトのペラン教授の影響のほうが大きいであろう。モノーは文学に歴史的接近を企てるペランの講義が新鮮であったことや、高等師範で歴史を専攻することを決めるのにペランの協力があつたと記している⁽¹⁵⁾。さらにエドモン・ド・プレサンセが一八六四年に、『教会とフランス革命』という歴史書を著わしたことも参考になるであろう。リセ時代のモノーはエドモンから、かれがまとめつつあるフランス革命の歴史を聞かされ、歴史への興味を一層そそられたであろうと推測されるのである。エドモンとの会話のなかで、ミシュレの『フランス革命史』も当然、話題になったことであろう。モノーがミシュレと親交を結んで文通を始め、「ミシュレの弟子」と自称していたのは丁度この頃(一八六五年)のことである⁽¹⁶⁾。

一級教員資格を取得するために尽瘁したモノーは、学位論文の準備という口実で、疲弊した心身の休息と賦活のためにイタリアへ旅だった。この旅行は、かれの人生を決する重要な出来事となる。この旅行を通じてかれは、二つの発見をしたからである。一つは生涯の伴侶を見いだしたという、かれの私生活を決定する事柄である。一八七三年に結婚することになる女性オルガは、このときの旅行で出会った女性である。またオルガの家庭教師であったマルヴェーダ・フォン・マイゼンブークによって、モノーはニーチェやワグナーを知り、文化的視野を大きく広げたことも注目に値する。マイゼンブークはマッツィーニ、ルイ・ブラン、ルドリユッロランの友人でもあつた。他の一つは、こ

の旅行を契機にして歴史研究に活眼を開いたことである。モノーは初め、イタリア芸術の壮麗さと多様性に魅せられて、フィレンツェの美術工芸の同業組合史を研究しようと考えた。しかしすぐにかねは、中世史の史料にあたるために必要とされる古文書学などの技術を殆んど知らないことに気づいたのである。

高等師範学校では古典語や文学が重視され、近代的な歴史学の方法は教授されなかった。高等師範の教育は、伝統的カリキュラムにそって行なわれていたからである。文科系一二講座のうち、歴史学の講座はわずかに二つしかなく、史料の取り扱いについても不十分にしか教えられなかったのである。⁽¹⁷⁾ しかも専攻する学科に専念するのは、最終学年の第三年次になってからであった。モノーが高等師範の教育について殆ど沈黙して語らなかったことは、高等教育への幻滅を逆に示しているといえる。モノーは高等師範の教授が、「歴史は何の役にも立たない。私は文学については何事かを知っているが、歴史について何も知らない」と公言して憚らなかつたことに驚惑を隠さなかつた。⁽¹⁸⁾ モノーと同級のラヴィスも、驚きをもって当時の高等師範を回想している。一つの史料に言及することもなく、千年の歴史を語る講義があったり、ドイツの法律を一つも読むことなく、ドイツの法制度についての論文を書いた同級生がいたからである。またモノーとラヴィスは、しばしばソルボンヌの歴史の講義を聞きにいったが、高等師範同様、表面的であることに変わりはなかつた。⁽¹⁹⁾ 当時のソルボンヌも歴史学の講座は、近現代史と古代史・古代歴史地理の二つしかなかつたのである。八つの歴史学講座をもっていたベルリン大学とは、比較にならないのである。⁽²⁰⁾

モノーはすでに一八六四年の高等師範在学中に、ドイツで学ぶことについてテーヌに助言を求め、ドイツの大学の状況や歴史学の実状についての知識をえていた。⁽²¹⁾ 従って如上の劣悪な教育環境で歴史を学んだモノーの結論は、「歴史と歴史の方法の研究」をするためにドイツに行くことであつた。⁽²²⁾ というのは、当時、中世史の研究が最も広く組織されてきたのはドイツであつたからである。「中世に専念したいなら、ゲッティンゲンに行き、科学的洗礼を受けねばな

らない⁽²³⁾」のである。それにオルガとの婚約がうまく整わなかったことも、モノーにイタリアを去ることをよぎなくしていた⁽²⁴⁾。モノーは傷心のなかで渋々ドイツに旅立ったとはいえ、このドイツ留学を通じて歴史研究者となるのである。モノーは観想の人ではなくて、行動の人であった。

- (1) Christian Pfister, "Gabriel Monod," R.H., CX (1912), xxii. なおモノーとニコシマンの関係については続稿で論ずる予定である。
- (2) Gabriel Monod, *Les matres de l'histoire: Renan, Taine, Michelet* (Paris, 1894), 313p. Do., *Jules Michelet: études sur sa vie et ses œuvres avec des fragments inédits* (Paris, 1905), 384p. モノーの死後、シャルル・シモンとブリー・オーセルによつて Monod, *La vie et la pensée de Jules Michelet* (Paris, 1923), 2vols. が編集された。この本は一九七五年に再版されている。筆者は未見であるが、モノーはたゞ一八七五年に Monod, *Jules Michelet* (Paris, 1875), 124p. という文学的作品を出している。この本に对する書評が *Revue critique d'histoire et de littérature*, No. 7 (13 février 1875), 107. がある。
- (3) Monod, *Allemands et Français: souvenirs de campagne*, 2^eéd. (Paris, 1872), p. 140.
- (4) Charles Bémont, "Gabriel Monod" R.H., CX (1912), i-vi., Benjamin Harrison, *Gabriel Monod and the Professionalization of History in France 1844-1912* (The University of Wisconsin, Ph.D., 1972), chs. I-IV., Martin Siegel, *Science and the Historical Imagination: Patterns in French Historiographical Thought 1866-1914* (Columbia University, Ph.D., 1965), ch. II., Charles-Olivier Carbonell, "La naissance de la Revue historique 1876-1885," R.H., CCLV, no. 1 (1976), 340-345. (以下 La naissance の註記)
- (5) どうしても当時の高学師範は校則が厳しく、ラブレール、ゲーテの『ウェルテル』、ミシユレの『魔女』などは禁書扱いで読むことはできなかった。Ernest Lavisse, "A l'École normale: l'ancienne discipline," *Revue de Paris* (15 mars 1914), 237.
- (6) Monod, "Un disciple de Vinet, Edmond de Pressensé," in G. Monod, *Portraits et souvenirs* (Paris, 1897), pp. 221-227., cf., André Encrevé, *Protestants français au milieu du 19^e siècle: les réformes de 1848 à 1870* (Genève, 1986).
- (7) Gordon H. McNeil, "Charles Seignobos 1854-1942," in S. William Halperin ed., *Essays in Modern European Historiography* (Chicago, 1970), 352-353.

- (8) Carbonell, *La naissance*, 347-351.
- (9) モノーの少年時代は、二月革命からファルー法の成立(一八五〇年)と、初等および中等教育をめぐる教育理念が大きく揺れ動いたと述べている。Robert D. Anderson, *Education in France 1848-1870* (London, 1975), chs. 1-6. 阪上孝編『一八四八 国家装置と民衆』(ミネルヴァ書房、一九八五年)所収の谷川稔・上村祥二両氏の論文を参照されたい。
- (10) Monod, *Portraits et souvenirs*, p. 226.
- (11) Monod, "François-Tommy Perrrens 1822-1901," *Revue internationale de l'enseignement*, XLIII(1901), 108.
- (12) Donald F. Lach, "Ernest Lavisse 1842-1922," in S.W. Halperin ed., *op. cit.*, 145. Charles-Olivier Carbonell, *Histoire et historiens, une mutation idéologique des historiens français 1865-1885* (Toulouse, 1976), p. 419. (以下、*Histoire et historiens* と略記)
- (13) Lavisse, *op. cit.*, 225-241. ラヴィスより二〇年以上あとに入学したロマン・ロランにとっても、高等師範は「旧制度の最後の日を生きていた」「ユルム街の僧院」にほかならなかったのである。『ロマン・ロラン全集 17 自伝と回想』宮本正清訳(みすず書房、一九六九年)二九、三八頁。
- (14) Monod, "Hommage à M. Gabriel Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXII (1896), 551.
- (15) Monod, François-Tommy Perrrens, *op. cit.*, 108.
- (16) Carbonell, *La naissance*, 345.
- (17) 一二講座の内訳は以下のとおりである。歴史学、哲学、古代ギリシア語・ギリシア文学、ラテン語・ラテン文学、フランス語・フランス文学が各二講座、比較文法と地理学が各一講座の計一二講座である。フィステルは、一八九三年までの高等師範には二人の歴史学教授を数えるだけで、一人は古代を、もう一人は中世と近代を担当し、この状態は一九〇二年まで変わらなかったと述べている。クラークの資料では、二つの歴史学講座は、一八九八年に古代史と中世史の講座として分離独立したことになっている。
- † Pfister, *op. cit.*, xvii. Terry N. Clark, *Prophets and Patrons: The French University and the Emergence of the Social Sciences* (Cambridge, 1973), p. 65.
- (18) Monod, "Bulletin historique," *R.H.*, XLIV (1890), 135.
- (19) 以下、William R. Keylor, *Academy and Community: The Foundation of the French Historical Profession* (Cambridge, 1975), p. 38.

- (20) Allan Mitchell, "German History in France after 1870," *Journal of Contemporary History*, II, No. 3 (1967), 84.
- (21) Harrison *op. cit.*, pp. 5, 33-34., Carbonell, *Histoire et historiens*, p. 424.
- (22) Monod, "Comptes-rendus critiques," *R.H.*, XCIV (1907), 162.
- (23) Monod, "Georges Waitz et le séminaire historique de Goettingue," in *Portraits et souvenirs*, p. 108. なおこの小論は *R.H.*, XXXI (1886), 382-390. に発表されたものである。
- (24) Carbonell, *Histoire et historiens*, p. 419, p. 426., Harrison, *op. cit.*, pp. 85-98. オルガは「ロシアの革命家で文学者でもあったアレクサンデル・ヘルツェンの娘である。」

三 歴史家モノーの誕生

(一) ヴァイツとの邂逅

モノーは一八六七年一〇月から翌年の六月までの二学期を、ドイツで過ごした。ドイツに留学することは、モノー家の習慣でもあった。モノーが留学した大学は、ベルリン大学とゲッティンゲン大学である。ともにドイツの歴史研究の拠点となった大学である。ベルリン大学はランケ史学の牙城であり、ゲッティンゲン大学はベルリン大学より半世紀も早く、史料批判のうえに出来事のみならず物語風に再構成することをめざしていた。⁽¹⁾ ドイツで学んだモノーは、「今世紀の歴史研究に多大な貢献をしたのはドイツである」⁽²⁾ことを肌で感じたのである。高等師範で皮相な歴史しか学ばなかったモノーは、ドイツ史学の堅実な考証に魅了されたのであった。かれはベルリン大学では、ヤッフェとラツァルスの講筵に列席した。ヤッフェはランケの後継者であり、モノーもヤッフェのゼミナールに参加している。⁽³⁾

しかしヤツフェの印象が薄かったのか、モノーはかれについては殆ど何も残してはいない。モノーはベルリンでは、歴史家のヤツフェよりも心理学者かつ社会学者のラツアルスに、感動したようである。それはモノーがラツアルスのもとをしばしば訪れていたことや、一九〇七年と一九一〇年に、ラツアルス夫人の手になる回想録を、好意的に書評していることにも示されている。⁽⁴⁾ラツアルスは、民族心理学の開拓者として令名の高い学者であった。『民族心理学雑誌』は、かれの手によつて創刊（一八五九年）されたのである。モノーはかれから、心理学や社会学という新興の学問を学んだのである。モノーはラツアルスの「集合心理学」（モノー）的アプローチや、社会学と歴史哲学をも包含する総合的方法に示唆を得たのであった。⁽⁵⁾われわれはラツアルスの影響を、普仏戦争の体験から生まれた『ドイツ人とフランス人』に看取しうる。仏独両軍の兵士の性格を研究したこの本は、あるドイツ紙によつて「民族心理学への貢献」と題されて翻訳されているのである。⁽⁶⁾モノーはラツアルスの学際的方法、新しい学問を作り出す情熱に感銘したのであろう。

ついでモノーは、ゲッティンゲン大学に移り、ゲオルク・ヴァイツのもとで学んだ。ヴァイツはランケの高弟であり、中世史研究の第一人者であった。イタリア旅行で中世史研究に一念発起したモノーが、中世史のランケたるヴァイツを訪れたのは自然のなりゆきである。自然のなりゆきが、モノーのその後の人生を決する必然の帰結となる。モノーにとつてヴァイツとの邂逅は、いわば啓示となったからである。ヴァイツによつて、モノーは自分のなすべきこと、進むべき道を見いだしたのである。これ以降のモノーは、ヴァイツに導かれているかのように、ヴァイツの生の軌跡を忠実に辿っている。モノーは、フランスのヴァイツたることをめざしたのであろう。

ゲッティンゲン大学で、モノーはヴァイツから非常に多くのことを学んでいる。それは歴史学の方法という狭い領野を越えて、学問全般、教育一般と多岐にわたっているのである。それではモノーがヴァイツから何を摂取したのか

を、モノーがヴァイツの訃報に接してしたためた小論によって明らかにしよう⁽⁷⁾。この小論は単なるネクロロジでも回想記でもなく、ヴァイツの人と業績を抑制されたトーンで記したヴァイツ論である。ここで重要なことは、このヴァイツ論は同時に、モノーの歴史観の表明でもあるという点である。肉親や知己の死という人生の節目にたちいたったとき、歴史意識の覚醒をみることは人のことわりであろう。とりわけ歴史家にあつては、それが鋭く自覚されるはずである。一八八六年五月二三日にランケが、翌二四日にヴァイツがあいついで幽明境を異にしていた。わずか一日の違いで近世史と中世史の偉大な歴史家が鬼籍にはいったことは、かれらの警咳に接したところのあるモノーを悲しませると同時に、かれらの歴史学を再吟味する機会をモノーに与えたのである。つまり兩名の死はモノーにとって、かれらの歴史学を再定立し、かれらから継承すべきものを再確認する機会となったのである。

モノーは、ランケとヴァイツを比較しながら両者の方法について語っている。ランケの方法は、近世の公文書を知りつつ批判的に取り扱うこと、多量な原典から選択的に史料を抽出しそれを入念に研究すること、一般的見地から史料を説明すること、「幅広い歴史的総合『vastes synthèses historiques』」を引きだすために史料をまとめることと要約される。これに対してヴァイツの方法は、不完全で乏しい史料の詳細な分析によってあらゆる歴史情報を引きだすこと、その情報を体系的 *avec méthode* かつ慎重に分類すること、しかしそれから一般的結論を導出することには留保的であつたことである。モノーはこのように両者の方法を語った。一見、両者は一般化の問題について見解を異にしているように思われる。しかしヴァイツも、一般化や全体的なものの方見方に反対なのではない。ただ性急な一般化を戒めたのである。ヴァイツは歴史の全体を見わたす眼をもっていた。それはかれがギゾーを称讃し、文明と制度の同時的影響を認識していることに窺知しうるのである。かれはア・プリオリな歴史の構築や、歴史解釈の主観理論を否定し、一般化に政治的宗教的先入見がはいりこむことに用心したのである。ヴァイツにとって「一般化とは、諸事実

の集合でしかない」のである。⁽⁸⁾

従って二人の方法論に、本質的な違いはないのである。それはせいぜい、中世と近世という両者が対象とする時代の相違と違ってよい。この相違が、方法論の若干の差異をもたらしたと筆者には思われるのである。ランケが近代革命とその指導者に関心をもち、政治的心理的な歴史叙述をしたのも、ヴァイツが制度に関心をもち、制度の成立要因を探ったのも、単なる関心の相違というよりは対象とする時代の相違に還元しうるのである。モノーもこのように理解していたことであろう。

このような方法的態度で、ヴァイツは後進の指導にあたった。ヴァイツは若い研究者に分析的歴史研究を説き、この流れに棹さしたのである。しかしその後継者たちの間に、師の全体的な見地が失われつつあることをモノーは看過しなかった。それは次のような不満となつて吐露されるのである。今日の歴史研究の状況は「過度にモノグラフィーに流され」、「限りなく瑣事に没頭しており、ある時代全体の歴史や諸制度を再構成せんとする労作を表面的と呼ぶにいたつている」⁽⁹⁾と。このような状況は、単にドイツだけではなかった。同時期のフランスでも「歴史の一般化や歴史哲学に過度の不信が表明され、総合をめざす試論に峻厳な評価が下されていた」⁽¹⁰⁾からである。これらの指摘は、歴史学の現状に対するモノー自身の批判と解してよいであろう。モノーの眼光は、実証的研究が陥りやすいトリヴィアリズムを見逃さなかつたのである。であるからこそモノーは、ヴァイツがニーブル、ランケ、モムゼンといった広範な視野と大志をもつ世代に属していることを強調するのである。⁽¹¹⁾

モノーはヴァイツから、歴史の方法を学んだだけではなかつた。ゼミナール教育のメリットや歴史教育の方法をも学んだのである。なぜなら当時のフランスには、ゼミナール制度はなかつたからである。初等師範学校⁽¹²⁾ *Ecole normale primaire*と同じく、ゼミナールもドイツから輸入されねばならなかつたのである。

ヴァイツもランケと同じく、ゼミナール教育を重視していた。モノーが原典の批判、起源の批判、制度の批判を教えられたのも、ヴァイツのゼミナールにおいてであった。ヴァイツのゼミナールは、ランケのそれがなくなつてのち、最も著名なゼミナールであり、多くの俊秀を集めていたのである。ヴァイツの書齋で開かれたゼミナール（一八六七—一六八）からえた感動を、モノーは以下のように回想している。モノーはヴァイツのゼミナールに出席すると、学識はより深まり、思想はより明晰となり、精神はよりよく整理され、真理と科学への愛情と尊敬の念はますます高まり、学問への決意を新たにして退出したと。モノーをしてこのような最高級の讃辞を、ヴァイツに送らしめたものは何であらうか。モノーに既述のような教育効果をもたらしたものは、ヴァイツの教育に対する献身的態度である。とりわけゼミナール教育に注ぐかれの熱意である。ヴァイツはゼミナールに全身全霊を捧げ、そこでの道徳的かつ知的活動を通じて、学者と同時に人間を養成することを願ひ、そのためにゼミナールの場で最良の自己をいつも示していたからである。それはヴァイツ自身が、モノーに語つた言葉に明らかである。「私の最良の作品は、私の弟子 *mes élèves* である。……私の本はいつか乗りこえられ忘れさられるであろうが、私の弟子はより良い書物を書く学者を養成するのに役立つであろう。」⁽¹³⁾これらの言葉は、フランス史学の現状を憂慮するモノーの琴線に触れたことであろう。のちにモノーが「師の真価を知るためには、弟子への師の影響を考慮せねばならない」⁽¹⁴⁾と発言したのも、このような文脈のなかで理解することができるのである。ともあれヴァイツの教授方法や教授態度は、モノーにとって亀鑑となつたのである。

また史料の収集と出版という点でも、ヴァイツはモノーの師であつた。ヴァイツは早くから、ドイツ中世史の史料集である *Monumenta Germaniae Historica* の出版に関与し、一八七五年にはベルリン大学に移ると同時に、その編集主任となつて陣頭指揮にあつたのである。ヴァイツは最晩年の一八八五年にすら、ヴァチカンの図書館で校合対

照にあたるという労をいとわなかった。史料を博搜するヴァイツの熱情は、周囲の者を動かさずにはおかない。モノも帰国後、史料の編纂やビブリオグラフィの整備に携わったことは周知の事柄である。

さらにヴァイツが、ランケの『ドイツ帝国年報』の協力者であったり、また一八六〇年からは『ドイツ史研究』を編集し、歴史的批判の作業を推進したこともモノーにとって模範となった。なぜなら学術雑誌は、単に研究成果の遅滞ない公表を可能にするという消極的意味にとどまらず、研究水準の公布という積極的意味をも有するからである。一八六〇年代のフランスには、歴史学全般にわたる専門雑誌はなかった。ところがドイツでは、一八五九年に『史学雑誌 Historische Zeitschrift』が創刊されていた。モノーは専門雑誌が、学問の活性化に不可欠な制度的武器であることを知ったのである。モノーをはじめとしたフランスの若き歴史家にとって、専門雑誌の発刊は焦眉の急となる。しかしモノーがヴァイツのもとを辞去してから、『史学雑誌 Revue historique』の創刊を見るまでなお八年の歳月が必要であった。

以上のように、歴史学の方法論、歴史教育の方法、史料の収集、雑誌の発刊と、あらゆる点でヴァイツはモノーの師表であった。いかにモノーがヴァイツに親炙していたかが諒解できるであろう。しかしモノーが、ヴァイツの熱狂的盲目的崇拜者ではなかった点に注意すべきである。一八七三年にモノーはヴァイツの本を書評しているが、師に阿諛することなく、公正に論じ、学者としての良心を保持していたからである。⁽¹⁵⁾

(二) 高等研究院とモノー

ドイツ史学の方法を体得し、フランス史学の課題を自覚して、モノーは一八六八年の春に帰国した。帰国後もモノーは古文書学院で史料学の研鑽をつんだが、同年一二月にかかれは、設立されたばかりの高等研究院の復習教師に任命

されている⁽¹⁶⁾。高等研究院は一八六八年七月三十一日に、当時の文部大臣で自身も歴史家であったヴィクトール・デュリュイ⁽¹⁷⁾（一八一—一八九四）によって創立されたものである。その目的は、科学の振興と研究者の鍛練であった。高等研究院の創設は、デュリュイが高等教育の分野でなした最大の功績である。とはいえ、初等・中等教育の分野でなした改革に比し、デュリュイが高等教育の分野でなした改革は、わずかでしかない。高等教育の改革には、それだけ障害が多かったのである。従ってデュリュイが、フランスの高等教育の立ち遅れを痛憤し、高等教育の改革が進捗しないことに業を煮やしたのも当然であろう。業を煮やした末の行動が、高等研究院の創設であったのである。

デュリュイは、自由帝制を象徴する開明的な大臣であった。かれは古代ローマ史を専攻していたことが機縁となつて、ナポレオン三世の知遇を得た。それが結果的に、デュリュイに大臣の椅子をもたらしことになったのである。大臣に就任するまでのデュリュイは、教育研究者かつ教育行政官としてのキャリアを有し、学校教育や教育行政について、豊富な知識を蓄えていた。高等師範卒業後、デュリュイは大半をリセやコレージュの教授として過ごしたが、ミシュレの助手を勤めてソルボンヌで教鞭をとったこともあったし、一八六二年には理工科学校の歴史学講座の初代教授に就いてもいた。このようにデュリュイは、中等・高等教育の現状を知悉していたのみならず、六一年からは大学区視学や教育総監をも勤め、文部行政にも通暁していたのである⁽¹⁸⁾。

一八六三年六月に、デュリュイは文部大臣に就任した。かれは諸外国の高等教育の実態を調査し、フランスの高等教育の改革に着手する。フランスの病状を診断したデュリュイは、仏独両国の霄壤の差を冷静に受けとめ、ドイツへの留学制度を設けたりしていた。モノーもこの制度を利用して、ドイツで学んできたのである。ドイツに学んだモノーも、彼我の高等教育の格差を痛感した。かれはいろいろな折りに、ドイツの大学を讚える発言をしている⁽¹⁹⁾。それは「ドイツが科学の進展に卓越した影響を及ぼしているのは、大学によってである」ことを率直に認める発言や、その「ド

イッの大学のなかにモノーは、フランスの古い大学の後継者と将来のフランスの大学の模範を見いだし、従って「フランスにもドイツと同じ大学生活を創造する」ことを夢みたりする発言となって表われているのである。ヴァイツがドイツの大学を「非凡な科学的作業場 un prodigieux atelier scientifique」に変え、その作業場で「未来の総合」に資する人材と史料を用意したことは、理想的な大学のありかたとしてモノーの脳裏にいつまでも揺曳していたのである。このようにドイツにあつては、大学が学問の拠点であつた。大学が産みだす学問研究が、ドイツに優越的地位を与えたのである。ところがフランスでは、大学 Facultés の研究水準は低く、高等教育は不在であるといわれる状態が続いていた。⁽²⁰⁾モノー自身、それを次のように語っている。当時のフランスには総合大学 Universités がなく、大学 Facultés は実務家の養成と有閑者への気晴らしの提供、それに試験準備以外の目的をもつておらず、「国民の科学的教育」のための活動をしていないと。⁽²¹⁾高等教育の改革が日程にのぼらざるをえない状況が存在したのである。ドイツから帰国したモノーが、教育改革を唱えるデュリュイに共鳴したのはコロラリーであろう。

一介のノルマリアンにすぎなかつたにもかかわらず、モノーは文部大臣に謁見する榮譽をもつた。媒介者となつたのは、ラヴィスである。ラヴィスは六八年に、デュリュイの秘書となつたばかりであつた。ラヴィスが大臣の秘書に招かれたのは、デュリュイの息子アルベールとの交友に負うところが大きい。ラヴィスはアルベールとは、リセ・シヤルルマーニュと高等師範で共に学んだ仲であり、高等師範卒業後、アルベールとの関係を深めていた。それに一時、デュリュイとラヴィスは通りを隔てて向かいあわせに住んでいたこともあり、個人的交際があつたと推測しうる。また高等師範時代の一級下には、もう一人の息子アナトール・デュリュイがいた。⁽²²⁾このようなコネクションによって、モノーは帰国するやいなや、文部大臣との面晤の機会をもちえたのである。モノーはデュリュイが没してのち、このときの会見を追想している。⁽²³⁾この追想によって、われわれはモノーの当時の考えや、デュリュイの高等研究院設立の

意図を知ることができず。おそらくこの場で、歴史学の革新の意気に燃えるモノーに、高等研究院のポストが提示され、協力が要請されたのであろう。モノーは大臣から研究院の計画を打ちあけられたとき、その計画に懐疑的であった。モノーは、新しい専門学校を作るより、既存の学部 *Facultes* を再編成し、「新しい精神」をそれに注入することを提案した。これに対してデュリュイは、学部の再編成には抵抗も大きく、そのうえ財政逼迫のおり難点が多い旨を述べた。現存の学部は改革への望みが見いだせない以上、デュリュイは学部の外から高等教育の改革に着手せざるをえなかったのである。高等研究院は、いわば大学人の太平の惰眠を破るべく、刺激剤としての役割を期待されたのである。それはデュリュイの次の言葉に明らかである。「高等研究院は、古いソルボンヌの亀裂のはいつた壁に、私がまいた種である。それは成長するにつれて、ソルボンヌを瓦解させるであろう。」⁽²⁴⁾

この会見から八年後に、モノーは高等研究院の役割を次のように述べている。高等研究院はなお十分に成功しているとは言いがたいが、専門教育を行なう古文書学院と一般教育を行なう高等師範という「二つの学校の間の有効な絆を創出する」ことを目的としていた。⁽²⁵⁾ 換言すれば、歴史に文学的アプローチを試みる高等師範と考証による専門的研究をめざす古文書学院の方法論的な揚棄であった。八年後の発言の意味するものは、ドイツの大学をモデルとして出発した高等研究院も、数年のうちに換骨奪胎され、フランス史学の伝統の継承と刷新の機関として位置づけられたということである。

かくして高等研究院は誕生した。当初、研究院は四つの部門からなりたっていた。第一部が「数学」、第二部が「物理・化学」、第三部が「生物学」、第四部が「歴史・文献学」を担当した。六九年一月に、第五部として「政治経済・行政学」が設けられている。⁽²⁶⁾ 自然科学部門が重視されていることは、明白である。科学技術の振興を使命としていたのであろう。しかし普仏戦争の敗北とともに、第四部にも重要な役割が与えられる。歴史学が、共和主義的な国民作

興の課題を担うようになるからである。高等研究院の機構上の説明を続けよう。研究院には入試はなく、フランス人はもとより外国人にも門戸が開かれていた。学生は入学後、ふるいにかけられたのである。また研究院は、大学ではないので、学位授与権をもっていなかった。しかし大学の弊風に染まっていない研究院は、ドイツで多くの成果をあげているゼミナール方式を導入した最初の研究機関であった。フランスはゼミナールの欠如によって、方法論的知識の伝達をなしえなかつたのである。ゼミナールは、方法論の実習や応用の場でもあつたからである。高等研究院 *Ecole Pratique des Hautes Etudes* の名称のなかに、「実習 *Pratique*」がある意味は、非常に大きいのである。デュリュイが聴講生的学生 *auditeur* と研究生的学生 *étudiant* とを区別し、フランスの文理学部は後者の学生を必要としていると述べるのも、ゼミナールによって研究生的学生を育てることができるといふ確信に基づくのである。このように高等研究院は、科学的方法を重視し、ドイツの大学 *Hochschule* をモデルとした。ドイツの大学を忠実にコピーする意図はデュリュイにもなかつたが、ゼミナール方式の導入とともに、ドイツの解釈学的方法の無批判な受容が行なわれたことも否めない⁽²⁷⁾。

ともあれモノーが研究生生活の第一歩を始めたのは、復習教師という薄給で地味な身分からであつた。それに高等研究院の施設も貧弱であつた。高等研究院は費用をかけず、「一本のペンと一枚の紙」(デュリュイ)から作られただけに、独自の建物をもたず、大学図書館の一室を間借りするというありさまであつたのである。ソルボンヌの図書館での演習は、人の出入りによって中断をよぎなくされるので、モノーは自分のアパートの客間を教室にしたこともあつたほどである。このような環境であつたにもかかわらず、少人数による専門的研究と大学の公開講義との差は歴然としていた。一方は文書の読解や、テキストの逐語解釈とその批判を学生とともに行なうのに対して、他方は聴衆に結論の一節を示したり、才気にみちた名講義をすることに主眼がおかれたからである。高等研究院の第一期生であるジ

ユール・ロワは、モノーの教授方法を次のように回想している。「モノーはわれわれに、怠惰な精神によって伝えられ、文学的装飾によって糊塗された皮相な概念と絶縁すること、文書を捜し求めて読破し、それを注釈すること、歴史家の証言を逐語的に吟味することを教えた。師と生徒の協力があつた。われわれはテキストの解釈を用意し、モノーはわれわれを批判し誤りを正し、それが可能であればつねに、われわれに真理と合致する解決策を発見することを諦めさせなかつた。⁽²⁸⁾」

高等研究院ではモノーは第四部に所属し、中世の史料研究に打ちこんだ。その成果が、『メロヴィング朝史料に関する批判的研究』（一八七二年）である。同僚にはアルフレッド・ランボーと、ガストン・パリス（一八三九—一九〇三）がいた。ランボーは高等師範でモノーの一級先輩であり、近代史を担当した。G・パリスは文献学を担当し、ボン大学のフリードリッヒ・ディーツのもとで学んできていた。これら若き三名の歴史家は、ドイツの歴史学方法論で武装し、新しい歴史をフランスに産みだす意気に燃えていた。一八六八年の時点で、モノーが二四歳、ランボーが二六歳、パリスが二九歳であつた。また二六歳のラヴィスは、デュリュイの改革に関与し、教育行政への関心を高めつつあつた。フランス革命の指導者たちが三〇歳前後で大をなしたように、歴史学の革新もこれらの若い世代によって成しとげられるのである。しかしそれには、かれらが依存してきた第二帝制の崩壊を待たねばならなかつた。

第二帝制の弔鐘となつた普仏戦争は、モノーを学究の道から逸脱させた。ノルマリアンは兵役免除の特権をもつていたが、モノーは志願して看護兵となり、戦場を駆け回つたのである。このとき見聞したこと証言録が、『ドイツ人とフランス人』である。この本は幻想をすて正確に仏独両国の現状を直視し、同胞に真理を告げねばならないという使命感に満ちあふれている。ここには歴史家としてのモノーがいるのである。われわれはモノーの厳正な態度、すなわち事件を冷静に眺めようとする公正な態度と、自己の狭い体験を一般化することへの禁欲的態度をそこに看取しう

るのである。これはヴァイツの態度でもあった。序文で自ら語っているように、モノーはあるがままの事態を観察し記述するというランケ的立場をとったのである。⁽²⁹⁾しかしモノーは、ドレフュス事件のときに反ドレフュス派から糾弾されたような意味での親独派ではなかった。⁽³⁰⁾確かにモノーは、フランスの将兵の態度を批判し、敵国の兵卒のなかに平和愛好の美点を認めたが、かれはドイツの将校や政治家や学者の諸悪を指摘することも忘れなかった。「民族的憎悪を煽り」、「宗教・科学・文化を腐敗させ、理想を忘れ、正義感を曇らせ、利に貪欲で偏狭な愛国心をもった」ドイツの知的エリートに、モノーは厳しい眼をもっていたのである。⁽³¹⁾『ドイツ人とフランス人』は、シャルル・モーラスによって酷評されたが、この時期のモノーがマイゼンブークやG・パリスにあてた手紙の示すところでは、モノーは決して単純なドイツびいきではなかったのである。モノーが愛するのはゲーテのドイツであって、ビスマルクのドイツではなかった。⁽³²⁾それにミシュレへの手紙のなかでも述べているように、モノーは「ドイツの学問の熱狂的賛同者」ではなかった。かれはドイツの学問の長所を認めつつも、生の輝きを失い、生の秘密を解きあかしえないドイツの学問に不満も表明していたのである。⁽³³⁾ともあれ愛国的熱情が横溢していた当時としては、モノーは普仏戦争に公正な評価を下したといえる。それはドイツとフランスの現状への客観的認識に、裏づけられていたのである。モノーも言うように、「一八七〇年の戦役は、われわれにとって歴史批判の貴重な教訓であったのである。⁽³⁴⁾」

敗戦とともに、モノーは教育研究活動を再開した。かつての自称「赤い共和主義者」も突発したパリ・コミューンに戦慄し、民衆への軽侮の念を強めたが、⁽³⁵⁾この穏健な共和主義者は、第三共和政の成立とともに、歴史のための闘いを本格的に始めたのである。一八七〇年から一九一二年の生死の関頭に立つまでのモノーについては、稿を改めて論ずることにしよう。

- (1) Georg G. Iggers, *New Directions in European Historiography* (Middletown, 1975), pp. 12-18. 中村・末川・鈴木・谷口訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』（晃洋書房、一九八六年）一三〇～一三二頁。
- (2) Monod, *Du progrès*, *R.H.* 1(1876), 27.
- (3) W. R. Keylor, *Academy and Community*, p. 36.
- (4) Monod, "Comtes-rendus critiques," *R.H.* XCIV(1907), 162-164. et CIV(1910), 406-407.
- (5) Monod, *R.H.* XCIV(1907), 162-163.
- (6) Monod, *Allemands et Français*, p. 11, p. 58.
- (7) Monod, *Portraits et souvenirs*, pp. 99-115. なおヴァイツに論及した文献に、G・P・グーチ『十九世紀の歴史と歴史家たち 上』林健太郎・林孝子訳（筑摩書房、一九七一年）一六〇～二二二頁がある。
- (8) 以上' Monod, *Portraits et souvenirs*, pp. 99-100, 104.
- (9) *Ibid.*, p. 104.
- (10) Monod, "A nos lecteurs," *R.H.*, C(1909), 10.
- (11) Monod, *Portraits et souvenirs*, p. 104.
- (12) 高等師範学校が教授の養成を目的とするのに対して、初等師範学校は小学校の教師を養成することを目的としている。初等師範は一八一〇年、ストラスブールに設立されたのを嚆矢とする。ドイツの制度をまねたものであるが、その後、各県におかれ、一八三三年のギゾー法によって促進され、一八三七年には全国で七四の初等師範学校が存在した。Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967* (Paris, 1968), pp. 137-140.
- (13) Monod, *Portraits et souvenirs*, p. 102.
- (14) *Ibid.*, p. 221.
- (15) *Revue critique d'histoire et de littérature* (deuxième semestre de l'année 1873), 346-348.
- (16) モノーは二月初めでもなお、イタリアで同業組合史の研究を続けることと、高等研究院に就職することとの間で迷っていた。復習教師のポストをモノーが引きうけたのは、デュリュイの説得によるところが大きい。B. Harrison, *Gabriel Monod and the Professionalization of History in France 1844-1912*, p. 50.
- (17) デュリュイについて Sandra Horvath-Peterson, *Victor Duruy and French Education* (Baton Rouge, 1984), Jean Rohr,

Victor Duruy, ministre de Napoléon III (Paris, 1967).

- (18) Monod, *Portraits et souvenirs*, pp. 119-123. Horvath-Peterson, *op. cit.*, chs. 1 and 7. なおデュリュイが文相に就任する数カ月前に、テオドール・モムゼンがナポレオン三世に、フランスの高等教育の貧弱さを具申したことも、教育改革の気運を醸成するのに大きく作用している。皇帝は二人の古代ローマ史家によって教育制度の改革を促されたのである。
- (19) 以下の引用は、Monod, *Portraits et souvenirs*, p. 75, p. 114, p. 310, p. 317.
- (20) 渡邊和行、前掲論文、五九〇六一頁。田原音和『歴史のなかの社会学』（木鐸社、一九八三年）第四〜五章。
- (21) Monod, "Victor Duruy," *Portraits et souvenirs*, p. 127.
- (22) Horvath-Peterson, *op. cit.*, p. 55. D. F. Lach, *op. cit.*, 144-145. Keylor, *op. cit.*, p. 37.
- (23) Monod, *Portraits et souvenirs*, pp. 128-129.
- (24) *Loc. cit.*
- (25) Monod, *Du progrès, op. cit.*, 33.
- (26) 第二次大戦後の一九四七年に、第六部「経済・社会科学」が設けられ、この第六部は一九七五年に社会科学高等研究院として分離独立した。ここが、アナール学派の拠点になっていることは、多言を要すまでもないであろう。ル・ロワ・ラデュリ『新しい歴史』樺山その他訳（新評論、一九八〇年）五八〜五九頁。
- (27) Iggers, *op. cit.*, p. 47. 邦訳六〇頁。
- (28) Jules Roy, "Hommage à M. Gabriel Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, LIV (1907), 264.
- (29) Monod, *Allemands et Français*, pp. 7-9, 11-15.
- (30) 「モノーのようになりべらるな歴史家は、フランスの大学のなかにいるドイツの歩哨だ」と、右翼から非難された。Claude Digeon, *La crise allemande de la pensée française 1870-1914* (Paris, 1959), p. 445. M. Reberieux, "Histoire, historiens et dreyfusisme," R.H., CCLV (1976). Harrison, *op. cit.*, ch. VIII. デュリュイの本は、普仏戦争の敗北がフランス人の各世代に与えた心理的影響を分析した労作である。
- (31) Monod, *Allemands et Français*, p. 89, p. 95.
- (32) Carbonell, *Histoire et historiens*, pp. 419-428.
- (33) Monod, *La mission du vingtième siècle. Le Temps*, 5 septembre 1900.

(34) Monod, *Allmands et Français*, p. 138.

(35) Harrison, *op. cit.*, pp. 159-161., Carbonell, *Histoire et historiens*, pp. 430-432.

四 四 四 四 四

われわれは歴史家ガブリエル・モノーが誕生するプロセスを、高等教育の実態にも触れつつ、クロノロジックに追ってきた。結論として、以下のことを指摘しておきたい。モノーは一八七〇年代に実証主義歴史学の確立にむけた闘いを開始するが、本論で明らかにしたように、その芽は一八六〇年代に形成されていたことである。この時期のモノーに最も影響を及ぼしたのは、ドイツの歴史学、とりわけゲオルク・ヴァイツである。ヴァイツの影響は、歴史学方法論・歴史教育の方法・史料の収集と出版・専門雑誌の発刊と多岐に及んでいる。モノーはこれらのことをヴァイツから吸収し、フランスに移植せんとしたのである。そこにはフランス諸学の憂慮すべき状況があった。進んだドイツとの対比で、遅れたフランスがクローズ・アップされるという構図がそこにはあったのである。このような状況が、歴史学の独立を促すことになる。デュリュイの改革が、このような気運を高めた。高等研究院の第四部は、実証主義史学が制度に結実した最初の例であろう。実証主義史学の成立にとってこの第四部が演じた役割は、丁度、アナール史学の発展にとって第六部が演じた役割と同じであった。高等研究院は、一八七〇年当時はなお小さくて貧弱な組織であったが、新しい歴史学の強靱な拠点となるはずである。モノーの緻密な研究も、ここから始まったのである。しかしモノーが瑣末な考証に没頭していたのではないことに注意すべきである。ヴァイツは一般的観念をもつてい

たとモノーが力説したのも、瑣末にかかずらわつて大局を逸することへの戒めと解しうる。モノーがフランス史学の伝統の正統な継承者であることを示すのは、まさにこの点においてである。これはギゾーやミシュレなどの、一九世紀前半のフランス史学からモノーが学んだものであった。⁽¹⁾モノーは決して、ドイツ史学のエピゴーネンではなかつたのである。それはモノーが「ミシュレの弟子」と自称し、「過去を理解し説明すること」⁽²⁾を求め、全体的総合的視点を失わなかつたことに示されている。もっとも一八七〇年前後は、あまりに文学的ないし政治的な歴史に対抗する必要から、まだ堅実な考証の要求を前面に押しだしていた。しかし歴史家の間にこの方法が定着し、漸次、歴史家が史料実証主義という瑣末主義の陥穽に落ちこんでゆくにつれて、全体的な歴史把握の必要性がモノーの口吻となつて発せられるのである。かれが齢を重ねるにつれてミシュレ研究に打ちこんでいったのも、その表われと言いうるであろう。さらに最晩年にモノーが、アンリ・ベール主宰の『歴史総合評論』を高く評価し、他方で「歴史的総合に多くの用心や留保」⁽³⁾さらには「不信」を示したセーニヨボスを批判したのも、このような線上で理解できるのである。

畢竟、モノーはドイツの緻密な考証とフランスの大局的な歴史解釈とを結合させんとしたのである。考証は「総合のための準備」⁽⁴⁾として意味があつたのである。モノーがめざしたのは、科学と芸術の結合であつた。モノー自身、次のように語っている。「歴史は科学であると同時に芸術である。……完璧な歴史家になりたいなら、あらゆる芸術作品のなかに存在する個人的主観的要素を科学に結合させる必要がある。」⁽⁵⁾なぜなら「生を分解し分析するのは科学であり、生を再創造するのは芸術である」からである。すなわち、モノーの歴史学方法論とはヴァイツとミシュレのアマルガムであつた。モノーは一八七〇年代の初めには、このような歴史認識の地平に到達していたと思われる。モノーに課せられた仕事は、自身が最良と考える歴史学の一層の練磨とその普及である。かくして実証主義歴史学の制度化と組織化の闘いが開始される。これが続稿の課題である。

- (1) Monod, *Du progrès*, 30-33.
- (2) *Ibid.*, 37. イツガースも述べるように、単なる過去の理解だけではなくて、社会現象の説明という視座をもフランスの歴史学がもつことは、ドイツ歴史学との大きな相違といえる。この視座は、アナール学派もまた受けついでいるものである。Igers, *op. cit.*, p. 45. 邦訳五七～五八頁。
- (3) Monod, "A nos lecteurs," *R.H. C*(1909), 9-10. 確かにセーニヨボスには、このような面も見られるが、次のような一文を読むと、セーニヨボスの方法論も本格的な検討に値すると思われる。セーニヨボスはフュステルの『古代都市』にさながら芸術作品のような力づよさを与えたあのすばらしい統一は筆戦の衝撃によって粉碎され、史料論考の必要が、渾然と統一した作品を個々の断片と化してしまった」とか「フュステルの著作において、科学的価値と文学的価値とが反比例している」と批評したのである。シャルル・セイニヨボス「フュステル・ド・クーランジュ論」、クーランジュ『古代都市』田辺貞之助訳（白水社、一九六一年）所収、二二、二八頁。
- (4) Monod, "A nos lecteurs," *R.H. C* (1909), 11.
- (5) Monod, "Hommage à M. Gabriel Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, LIV (1907), 267.

（一九八六年七月脱稿）

〈謝辞〉 本稿執筆に際し、前川貞次郎京都大学名誉教授より貴重な史料を貸与していただいた。記して謝意を表したい。

〈お詫びと訂正〉 『香川法学』第五巻第四号所収の拙稿に校正ミスがありました。

(1)五六頁四行目、一還↓一環。(2)六八頁の注(2)の二行目、前提書↓前掲書